

# 長沢伴雄の苦悩——加納諸平毒殺未遂事件前後——

亀井 森

## 一 はじめに

江戸時代後期、特に天保期から安政年間（一八三〇～一八五七）にかけて活躍した紀州和歌山藩の国学者に長沢伴雄<sup>ながざと おお</sup>という人物がいる。長沢伴雄は、幕末に流行した類題和歌集『類題鴨川集』（嘉永元年（一八四八）～同七年（一八五四）刊）の編者として文学史に名を残している。

また同じ和歌山藩には伴雄と同じ本居大平門の先輩で加納諸平<sup>かのうもろひら</sup>という国学者がいる。諸平は伴雄に先んじて類題和歌集『類題和歌鯉玉集』を刊行し、幕末歌壇の一潮流を築いた。

ところが弘化四年（一八四七）に起きた、いわゆる「加納諸平毒殺未遂事件」を境にこの二人が袂を分かつことになったというのは周知とされている。しかし毒を盛ったとされる長沢伴雄側の資料が乏しく、事件の概略は主に加納諸平側からの視点で描かれている。そのため幕末歌壇の代表的国学者二人を巻き

込んだ一連の騒動の様相は正鵠を得ているとは言い難いのである。

本稿は加納諸平側の資料に依拠した山本嘉将氏の論考<sup>①</sup>に対して、事件前後の長沢伴雄側の状況証拠を新たに付加してより客観的な状況の把握を試みたいと思う。さらに、この事件に関わらざるを得なかった伴雄の立場、そして事件後に苦悩する伴雄の姿を浮き彫りにしたいと考えている。

なお本稿では主に台湾国立台湾大学図書館に所蔵される長沢伴雄旧蔵書（以下、長沢文庫<sup>②</sup>と略す）からその伝記研究の基礎資料となるべき天保・弘化年間の日記・歌稿類<sup>③</sup>を新しく資料として用い、従来の資料では欠落していた長沢伴雄側からの視点を付加することをも目的とする。

## 二 事件の顛末

この「毒殺未遂事件」は紀州藩政をめぐり、第十代治宝側と

当主十一代齊順側（齊順没後は齊彊<sup>なりゆき</sup>）の対立の中で起きた（とされている）。当時の紀州和歌山藩は本居宣長が治宝に召し抱えられた関係からそれ以後の鈴屋門である大平をはじめ、長沢伴雄・加納諸平・伊達千広等とともに治宝側であった。特に事件の黒幕と思される伊達千広は治宝派の腹心として藩改革の実権を握っていた。

そのような状況の中で、伊達邸に招かれた加納諸平は出された鴨料理に毒を盛られた。しかし事件は未遂に終わり、九死に一生を得た諸平は以後「狂病」また「失心風」に陥ったという。同じ治宝派に属していながら同士討ちのような形になった要因は諸説あり、どれも確定をみない。さらに山崎勝昭氏がその事件自体の有無にまで疑問を呈しておられる様に事件を語る諸資料の信憑性が低いと言わざるをえないのである。

では、何によってこの事件は伝えられ「事実」として語られることとなったのだろうか。それは一つの書簡による。山本氏は諸平が門人に宛てた書簡を唯一の証拠として、事件は実在し、そしてその実行犯を長沢伴雄だとしている。その書簡とは次のようなものである。

安政二年（一八五五）六月十五日に長沢伴雄は反治宝派の巻き返しによって罪を得て揚屋入りするが、この書簡はそのことを加納諸平が自分の門人に伝えたものである。その中で、諸平は八年前の「毒殺未遂事件」にも触れている（傍線、括弧内の注は筆者。以下同じ）。

二白。御聞及も御座候哉、当地（和歌山）に長沢衛門伴雄と申者有之、A十年以前迄（弘化二年頃）は志もあしからず相見え、其前二十歳許（文政十年）の比より詠草添削致し遣し、且何か少々講釈等も致し候而、熱心に相見え入魂に存候処、B弘化四年、奸佞の儀にかかはり候節、大いにいさめ候処、うはべは諾なひながら、野生（諸平）を毒殺致しかけ候事ありて、C其年（弘化四年十二月）大病に相成、以来（伴雄と自分とは）絶交に付、野生病氣世上へ申触候而、鴨川集と申書をあらはし、其他、官につきても種々妨事致候処、云々（安政二年六月二十一日付室谷賀親宛加納諸平書翰）

この書簡は約三十年間（文政十年頃から安政二年まで）にわたる諸平と伴雄との関係が簡略に述べられ、被害者である諸平が事件の実行犯について語った唯一の資料として重要である。

書簡によると、二人は文政十年頃より相交わる様になり、諸平が伴雄の詠草を添削したり、講釈なども行っていた。そして弘化二年頃までは伴雄の志も悪くなく二人の関係は良好であった。ところが弘化四年になって「奸佞の儀」に伴雄が関わった折、諸平はそれを諫めたが逆に長沢伴雄によって毒殺されかけた。事件後は諸平は病氣となり伴雄とは絶交したが、伴雄は諸平の病氣を世間に喧伝して、自分は「類題鴨川集」を刊行したという。

この書簡は諸平が認識していた「事実」としては重要である。

しかし、被害者が語る唯一の資料というのは有力のようでありながら反面危うい。このような諸平側からだけの資料では客観性を欠くと言わざるをえないのである。しかしながら本稿の目的は真犯人捜しをするものではなく、諸平が認識していた「事実」を伴雄側の資料から出来るかぎり検証することである。

この書簡は長沢伴雄と加納諸平の三十年にわたる関係を端的に表しているので、以下、文面を便宜上、青年期・壮年期、事件直前、事件後の三期に分け、それぞれ傍線A・Cとして長沢文庫の資料と照らし合わせながら二人の関係を追っていくことにする。

### 三 青年期・壮年期

書簡中、傍線Aのみを再度挙げて、さらに細かく傍線を付して見ていく。

①十年前迄（弘化二年頃）は志もあしからず相見え、②其前二十歳許（文政十年）の比より詠草添削致し遣し、且何か少々講釈等も致し候而、熱心に相見え入魂に存候処、青年期について、二人の年令は諸平が伴雄より二歳年長と近かったが、和歌・学問の才には早い時期から大きな差があったようである。時間の経過に沿ってみていくと、傍線②「二十歳許の比より詠草添削致し遣し、且何か少々講釈等も致し候而」と諸平が述べているごとく、また伴雄も同様のことを日記の中

かくて翁（本居大平）身まかり給ひて後は師とたてゝ、たのむ人もあらざりしかど、諸平が世にすぐれたる歌よみにてあるを幸ひにて、その、ちは柿園に行てよみける。その頃、上手は人ありて月ごとに六度づ、つどひてよむ事にてはありける。

（長沢文庫蔵『絡石の落葉』（〇六〇七五）<sup>⑧</sup> 天保十四年五月十日条）

大平が没した天保四年（一八三三）、諸平は二十八歳にして既に『類題和歌鯨玉集』第二編まで刊行しており、伴雄が言うように世に知られた歌人であった。長沢伴雄はこの時点では文学史上にほとんど登場してこない。このように二人の実力には開きがあったが、大平門の先輩後輩という間柄であり、年も近いこともあって二人が連れ立って遊山し、歌を残している記事は枚挙にいとまがない。「入魂」であった二人の姿を例として挙げる。

諸平にさそはれて近きあたりに物したるに歌杖をわすれたりとて諸平がいへる（伴雄）

歌杖に心つかぬは言の葉のみにちになづまぬしるしなるらむかへし 諸平

つれてゆく君を力とたのみてや歌杖にさへこゝろつかざる

（長沢文庫蔵『絡石の落葉』（〇六〇六〇） 文政十二年詠草）  
この時、長沢伴雄二十二歳、諸平は二十四歳の折の歌である

が、お互いの歌才を賞賛しあう二人が連れ立って詠作を行う姿から二人の親密度が覗える。

次に、傍線①「十年以前迄は志もあしからず相見え」にも伴雄側からも裏付けができる。事件の十年前とは弘化二年にあたり、伴雄が徳川治宝から命を受けて京で有職故実の修行をしていた時期（天保十年→弘化二年）と重なる。ここでいう「志」というのは学問の態度・姿勢をいうのか、それを含めた全体的な素行を言うのかさだかではないが、有職故実の修行に励んでいた姿は上京直後の天保十年の在京日記である『都の日記』（長沢文庫蔵、〇六一九二）に次の様にある。仙洞御所潜入記である。

仙洞御園にて田を植させて御覽せさせ給ふ事毎年の恒例なり。今年はけふと定らる。此日は御園中に女と稚男を入らしめて田植見物せさしめ給ふ。男はその役に当れる者の外は禁じたまふ。おのれは木具屋新右衛門といふ木具屋の下す男にaujてかしこかれど拝見に詣る。（五月十七日条）

伴雄は、仙洞御所にある木具屋蔵の倉庫番であった木具屋新右衛門の下男に変装して御所の田植えを見物し、日記にはその詳細な記録を四丁にわたって残している。このように変装して御所に潜入した記事は在京期間の日記に見られるだけでも他に三回あり、その熱意を買われたのか、翌十一年には高倉家へ入門を許されている。

また有職修行とともに伴雄は京都での人脈を広げ、その人脈

は後の『類題鴨川集』へと結実していくが、その様子を伴雄は自身の日記の中に次の様に述べている。

（私は）はやうより虚名を世に弘められたれば、さるべきものとやおもふらん。遠き国より歌見せにおこせ、また短冊こひにくる人などもあり、また京のすまひも年をへぬるまゝに、月次の会或は歌物語の講釈など、人のすすむるに従ひて物すなることかれこれと考合せておのれを世の中の宗匠だつ人と同じ列におもひとれる人も多かるやうに見ゆるは口と□□（二字虫損）浅ましくはづかしきわざになんある。（長沢文庫蔵『絳石の落葉』（〇六〇七五）天保十四年五月十日条）

天保十年に上京した伴雄はすでに天保十四年には引用したように「宗匠だつ人」と目され、月次の会や家会も行われていた。天保十一年十月二十五日には伴雄が家会を開いた記事が見え、それからさほど遠くない時期に伴雄は自身の結社「絳石舎」を発足したと思われる。

このように数年にわたる京での滞在は伴雄自身の学問的成長を促したが、それは一面であり、藩にとってこの伴雄の京都滞留にはもう一つの意図があったと考えられている。このことが弘化四年の事件にも関わってくるのであるが、次節に事件について触れた箇所をみていくことにする。

#### 四 事件直前―弘化四年―

前掲書簡の傍線Bは次の様なものである。

弘化四年、(伴雄が)①奸佞の儀にかかはり候節、(諸平が)②大いにいさめ候処、うはべは諸なひながら、野生(諸平)を毒殺致しかけ候事ありて、

まず傍線①の「奸佞の儀」について、当時の紀州藩の権力争いの中、水面下で種々の抗争・諜報活動が行われたことは想像に難くない。しかし伴雄が関わった「奸佞の儀」が何を指すのか、はっきりしたことはわからない。これについて『加納諸平の研究』では次の様に言う。「治宝側が京都の一条家と結んだときは、京都との連絡等で、長沢伴雄は機密に参加して動いていた」(三十九頁)という。これが「奸佞の儀」、あるいは「奸佞」に関わるものとは考えられるが、これについて山本氏は何ら証左を付しておられない。

また『南紀徳川史』(第六卷五六四頁「長沢伴雄」項)に、「一、(天保十年)四月二十一日、御内々御用筋にて上京致候様御内命」とある。この時期は長沢伴雄が有職故実の修行をするために上京した時期である。しかし『南紀徳川史』にはこの修行の為に上京する旨の記事はみられないので、おそらく徳川治宝が伴雄に命じた「御内々御用」とは「奸佞の儀」に関わることだろうと考えられる。さらに言えば実は治宝側からすれば有職故実の修行は「御内々御用」のためのカムフラージュという

側面もあったのかもしれない。<sup>12)</sup>

このような長沢伴雄の「御内々御用」に関するところで、傍線②のように諸平は伴雄のことを諫めたが、伴雄は表面上はその忠告に従いながらも、それには従わず逆に忠告した諸平を毒殺しようとした、という。

伴雄側の資料からは、伴雄が諸平に諫められたという記述は見あたらないが、『加納諸平の研究』によれば、「この年(毒殺未遂事件があった弘化四年)六月頃から(二人の関係は)表面化するほどに何かことを構へてしまつたらしい」と推察されている(八十六頁)。この推察には根拠が示されていないが、問題の弘化四年という年は、二人はあまり会う機会がなかったと思われる。この年の二人の動向は次の様なものである。

まず二月七日に久々に京都から帰ってきた伴雄は諸平と登楼している。その後、同月二十三日から五月十一日までには『紀伊国名所図会』の調査で諸平は和歌山に不在である。調査のために日高郡へ向かう諸平を伴雄ら友人が見送っているが、その時の日記の中で伴雄は次の様に書き残している。

二十三日、もろ平が日高郡廻歴するそのおくり(に)紀三井寺までゆく。神野易興・水崎久道・影久<sup>13)</sup>その外もあまたあり。(中略)けふ打むれたる十五六人の中にそのかみ友<sup>14)</sup>としては諸平とおのれ<sup>15)</sup>ならではなし。」

(長沢文庫蔵『絳石の落葉』(〇六〇七七) 弘化四年二月二十三日条)

傍線部は日記の末文である。古くからの友人は自分と諸平だけしかないと感じありげに結ぶ書きぶりからはささくれ立つものは何も感じられない。そして事を構えたとされる六月以降である八月にも諸平と伴雄は連れだつて遊ぶ姿が確認できる。

八月十六夜、諸平・和夫らと明光浦<sup>あかのうら</sup>に逍遙してよめる歌の中に

照月をうかべてゆらぐ玉つ島うしほは影をみぐくなり  
けり

#### 〔絳石の落葉〕<sup>⑬</sup>

歌集にそのようなことを書き残すはずはないだろうが、この月見の宴からは表立った対立は見られない。山本氏の推察通りなら、二人は対立しながらもわざわざ和歌浦まで連れだつて歌を詠みに行ったということになる。

その後、今度は伴雄が九月十日より高野山、多賀大社を巡り京へ戻っている。次に和歌山に伴雄が確実に帰ってくるのは、事件が起きたとされる十二月で、下旬に和歌山への帰国した伴雄は次の歌を残している。

都にて雪見むと待けるにつれなうふらざりけるを若山<sup>わかし</sup>にかへり来て十二月二十日ばかりいみじう積りければ

みやこにてうはの空なる白雪をけふ古里の庭に見るかな

#### 〔長沢文庫蔵『絳石の落葉』(一〇六〇五八) 冬部〕

この歌からは数日後に友人を毒殺しようという悲壮感や決意

は微塵もうかがえず、帰国の命がなければ、そのまま京に残つて雪見でもしていたかのようなのかさを感じる。事件直前までの伴雄の姿は残されているが、肝心の毒殺事件および事件後の諸平について、長沢伴雄が書き残したものは現時点では見つかっていない。『国学者伝記集成』によると、長沢伴雄の蔵書は藩に一部没収されたという。あるいはその没収された著述類の中に毒殺事件に関するものがあつたかも知れない。今後の台湾大学長沢文庫の調査過程でこの件について新資料を見いだすことを期待したいが、少なくとも歌文集の稿本類および日記類には全く出てきてはいない。次節に事件後の伴雄の動向について見ていきたいと思います。

### 五 事件後

事件後について書かれた傍線Cを再掲して考えてみたい。「其年大病に相成、以来絶交に付、野生病氣世上へ申触候而、鴨川集と申書をあらはし云々」とある。諸平の憤りも少し補いながら大略すると次のようになるだろう。事件後は自分は病氣となり伴雄とは絶交した。ところが伴雄は自分自身で事件を起こしておきながら、私(諸平)の病氣を世間に喧伝して、自分は『類題鴨川集』を刊行したという。

前述した様に諸平の病氣については山本氏の論考に詳しいがはっきりしたことはわからない。のみならず諸平の病氣は実は仮病だったのではないかという証言もある<sup>⑭</sup>。いずれにしても諸

平側の「事実」としては病気であつたわけだが、それを伴雄が世間へ言いふらしていたという事実は、この件に關して当時の国学者たちの間で交わされた書簡からは見いだすことはできない。

また事件後に絶交したということについても伴雄側の資料からは何もわからないが、事件直後の弘化五年（嘉永元年）に伴雄が刊行した『類題鴨川集』初編では諸平の歌を二十二首収録している。また翌嘉永二年刊の『類題鴨川集』次郎集でも十三首収録している。それに対して諸平は事件の前に刊行された『類題和歌鯉玉集』第五編（弘化二年刊）には伴雄の歌二十七首を収めているが、事件から五年後に刊行した同第六編（嘉永四年刊）には伴雄の歌は一首も収録していない。自分たちが編集した類題集に相手の歌を入れたか否かを絶交したかどうかという証左として掲げるわけではないが、事件後の二人の温度差をうかがい知ることはできよう。<sup>19</sup>ここで諸平が門人の飯田秀雄に宛てた書簡を引いておく。

当地（和歌山）はかねて教へたる人々もあだとなり、鯉玉の邪魔致し候もの等相聞え、ただ野生儀おとしめ候人のみに相成候間、はやく当地をのがれ、命を全う致し度候。

（嘉永三年四月、『加納諸平の研究』九十七頁）

この書簡の書かれた前年に諸平は治宝派の策謀から投獄されており、諸平の心神耗弱、切迫した状況がうかがえるが、ここで諸平が言う「かねて教へたる人々」で「あだ」となり、さら

に「鯉玉の邪魔致し候」人というのは伴雄に他ならない。このような資料が残っていることと伴雄側の資料の少なさから、次の様な山本氏の長沢伴雄像が導かれることになる。「（伴雄は）ひそかに、京都を中心に編集してゐた『類題鴨川集』を、諸平の失脚を自ら図つて、それが実現すると同時に刊行して成功した。」（『加納諸平の研究』二十七頁）

同じ派閥の僚友や教え子たちに貶められ殺されかかったと他国の門人たちに吐露し、自身の窮状を声高に訴える諸平だが、伴雄は当時の状況をどのように感じていたのだろうか。長沢文庫に残る弘化四年五年の詠草からそれを探り、苦悩する伴雄の姿を追つてみたいと思う。

## 六 伴雄の苦悩

一体、長沢伴雄は、かつて大平門にともに学んだ先輩でありまた大平亡き後は師でもあつた友人の毒殺を試み、そしてそれを踏み台に文壇に躍り出ようとするような冷酷な男であつたのだろうか。実は当時の国学者たちにはこの事件について具体的に噂が伝わっていたと思われる。大坂にいた国学者萩原広道が事件から約一年半後に周防の鈴木高輅に宛てた書簡に次の様にある。

長沢も何か国ニハ居らぬ杯とも申事ニ候、江戸へ出候とも、京とも、大坂とも色々ニ取沙汰仕、此節ハ一向行方定かに知レ不申候、夫故文通も見合居申候、是も何角と悪評いた

し候へとも、よもやさる事ハなかるへしと存居申候

この書簡からは事件後の伴雄の行方がわからないことと共に、具体的には示されてはいないが、なにか伴雄の常軌を逸した行状が漏れ伝わっていたことがわかる。その頃、伴雄は何を思っていたか。詠草が残っている。

『絡石の落葉』(○六〇六〇)は伴雄の年次ごとの詠草を集めた「雄の部」の稿本である。前述した様に、事件後の伴雄の状況を示す資料が少ないので、弘化四、五年の詠草は伴雄の心境をうかがう上で重要である。事件後の翌年に詠まれた「述懐」には、次の様にある。

世の中は横事(中傷) しげく左手のわがおくの手を人のし  
らずて

塵の身のとしのみ山とつもりけり心高さも世には見えじを  
伴雄は自分にまつわる誹謗中傷があることはわかつていた。

しかし弁解することは憚ねばならなかったはずである。前述したように、事は治宝公から命ぜられた「御内々御用」であり、反対派からすれば「奸佞の儀」に関わることであった。たとえ友人であり先輩である諸平にも「うはべは諸なひながら」も何とも言えなかったのではなかったか。また治宝公の格別の引き立てによって京へ有職の修行に行かせてもらったことに対して伴雄は大恩を感じており、主君の利となることであれば我身を省みない様子が窺える。弘化四年の「述懐」に、

身にあまる君がめぐみは嬉しさの涙ともして袖に見えけり

すはといはゞ神にまかせむ薄水ふみてわたるも我君のため  
とあり、主君治宝への忠義と同時に何か自分へ言い聞かせるような苦しみが見ええる。また同じ「述懐」では何か大きな流れの中に組み込まれてしまった自分の姿に対して、諦観にも似た覚悟をにじませる。

南ふくわかの出じまの風表たちいづくもなきわが身かな  
世の中を川と見なしてすむ物は流るゝ水とわれとなりけり  
弘化四年のこれらの述懐と先に見た弘化四年の伴雄の動向を  
合わせ見ると、また違う伴雄の姿が浮かび上がる。二月二十三日、諸平を見送った後に書かれた日記の末文「そのかみ友とては諸平とおのれならではなし」とは流されていく自分に気付きながら昔を懐かしむ伴雄ではないだろうか。そこに伴雄の孤独が垣間見える。その流されるままの姿はやがて後悔を生むことになる。事件後、弘化五年(嘉永元年)の「述懐」である。

哀れなど我世いすかのしたなく違い勝なる身と生れけむ  
忘れなむ涙の種とすてゝ寝し夢にまたさく物おもひのはな  
そこには、世間に対して我身の見苦しさを嘆き、何かを忘れてくても忘れられない苦悩がうかがえる。この後悔は事件後に刊行された『類題鴨川集』にも諸平の歌を収録しつづけたことに繋がるのではないか。伴雄には諸平に対する個人的な感情のわだかまりなどなかったのではないだろうか。この毒殺未遂事件までの長沢伴雄に、政治の権力抗争の中でひとつの駒として取り込まれていく姿を見いだすことができる。古い友人を失い、

また誹謗中傷の中、伴雄自身を保つ手段として詠歌があったと考えるのは想像に難くない。最後に弘化四年の歌を引いておく。

#### 述懐

いでやわれ人に後れぬ魂ながら拙さばかりさきだちに  
けり

#### 七 おわりに

長沢伴雄と加納諸平は同門の友人として青春時代を過ごし、次第に時代の渦に飲み込まれ、それに抗うこともできず、それぞれ別の道を歩んでいった。この後、加納諸平は紀州藩国学所初代総裁になり、長沢伴雄は獄中で自刃したとされる。その二人が最後に交差したのがこの毒殺未遂事件というのはあまりにも幕末的である。

本稿は資料の乏しい長沢伴雄側から検証を試みた。冷酷な姿で捉えられていた伴雄であるが、青年時代の諸平との交渉、京都での有職修行など新しく指摘し得たところが多いと思う。そして友人と主君への忠という二者択一にもならない選択に迫られ苦悩しつづけ、ただ歌にのみ心情を吐露するしかなかった伴雄の姿を追うことができるだろう。

台湾大学の長沢文庫の本格的な調査は始まったばかりである。その成果は幕末の京坂文壇研究においてはまだ些細なものにすぎない。しかし今後、無視できない成果が現れる可能性があるだろう。

注

(1)

山本嘉将『加納諸平の研究』(昭和三十六年十一月、初音書房)

(2)

台北帝国大学附属図書館は昭和七(一九三二)年二月二十五日、大阪の古書肆梁江堂杉本要から購入している(台湾大学図書館ホームページ)。当初は五〇五部一二六九冊であったが、戦後の混乱で散逸したと思われ、最近の調査では一〇七三冊(四八五部)が確認されている。

(3)

自筆日記は文政十二年から天保十三年までのおよそ十四年間に亘る十八冊の日記群である(抜けている期間もある)。戦前に台湾大学におられた福田良輔先生が「青年時代の長沢伴雄」(『愛書』第八号、昭和十二年)に一部引用されているが、その後の研究には使用されてこなかった資料である。また歌文集については、稿本類が二十三点(三十五冊)ほど残されている。その抜粋は子孫の手により明治四十年に『絡石の落葉』として刊行されているが全体の量からすれば僅かにすぎない。

(4)

前掲『加納諸平の研究』第二章第四節「失心風」考」八十六頁参照。

(5)

同書八十六頁に挙げられたものとして、諸平が窃かに反對派に通じていたという説(森敬三氏)や伊達千広の陰謀を記した書状を諸平が入手して、千広にそれを諷めたことにより逆に嫌われたとする説(折口信夫)がある。

(6) 「葎」第十五号（二〇〇七年三月十五日、私家版）七十八頁―九十六頁参照。氏が詳細に指摘されておられる様に、この事件について森敬三『幕末歌壇の研究』（昭和十年二月、楽浪書院）に収められた「加納諸平の研究」および「伊達千広の研究」に掲出された論証には出典が明記されておらず、「一挿話」「口碑」など資料性が低い。

(7) 『歌人書簡集』（室谷鉄腸編 大正十五年七月、播仁文庫）四十七頁。

(8) 長沢文庫に収められている長沢伴雄の歌集・文集・日記には「絳石の落葉」と題するものが十数種あるので、それらを区別するために書名の後にそれぞれ長沢文庫の書籍請求番号を付しておく。

(9) 高倉家は鎌倉時代以来の衣紋方であった大炊御門の流れを汲み、近世では將軍・武家の式の装束調達を任されていた。入門のことは、天保十一年の在京日記『都の日記』（長沢文庫（〇六一九二）三月二十三日条に次の様にある）、誓約文と許状の写しを載せている。「（天保十一年三月）二十三日、霽。けふ高倉家へ入門。（中略）衣文伝受あり。」そして修行の一つの大きな成果として、伊勢貞丈『武雑記』を補訂した『武雑記補注』（嘉永元年刊）が挙げられる。

(10) 前掲『加納諸平の研究』では伴雄が京で絳石舎として活動を開始した年時を弘化三年頃と推測されているが（一

〇四頁）、伴雄の在京日記『都の日記』（長沢文庫（〇六一九三）天保十一年十月二十五日条）には「二十五日、雨。二十二日より家に会を始め。百人一首を講じ、兼題を出して歌を詠む。」と初めて家会を開き、講釈など行っている姿が見られることから、天保末年中には絳石舎としての活動が始まったかと考えられる。

(11) 具体的な内容についてはわからないが、山本氏が指摘する一条家との関わりについて、在京日記には有職修行の合間を縫う様に、「大政所様」を頻繁に訪ねる伴雄の姿が見られる。この「大政所様」については本稿ではしばらく措くが、『都の日記』（長沢文庫（〇六一九二）天保十年六月十六日条に次の様にある。「十六日、快晴。今日嘉祥の餅。（中略）また一条殿より大政所の君へおくり給へるまんぢうとして大政所の君より給はる（以下略）」長沢伴雄が有職故実の修行のためだけに上京していたというのではないことはたしかである。

(12) 徳川治宝死去後に行われた反治宝派による治宝派の肅正によって伴雄は藩に捕縛されるが、伴雄はその時の状況を後日、回想して記録を残している（『国学者伝記集成』続編二〇三頁）。その中で「御内々御用相勤め候へとの事、此迄表向にて仰渡されたる事も非るを今日顯然と仰出されたる。」と述べている。

(13) 前掲『加納諸平の研究』八十六頁。

(14) 神野易興（かんのやすおき）は紀州藩士、本居内遠門。

水崎久道および影久は未詳。

(15) 福田和夫（にぎお）。中の島八幡神社祠官。

(16) 『絡石の落葉』（長沢六郎編 明治四十年十二月、吉川半七）

二十九丁オ。刊本には年時記載はないが、稿本である『絡石の落葉』（長沢文庫（〇六〇五八））にも同歌が収録され、その歌の題には弘化四年と明記されている。

(17) 『国学者伝記集成』続編二〇四頁。その没収されずに長沢家に残った稿本類が台湾大学に収められていると考えられる。

(18) 鈴木高輅宛萩原弘道書簡〔補第二（嘉永二年八月十一日）〕（関西大学図書館手紙を読む会「関西大学所蔵 萩原弘道 の消息（補遺）」「関西大学図書館フォーラム」第十一号、平成十八年六月）には「紀州諸平も益平復之由二ハ候へとも、何角悪評絶不申、狂ハ全く罪ヲ恐れて偽なりしなとも申候」とある。

(19) もっとも伴雄の『類題鴨川集』の三編にあたる三郎集（嘉永四年）以降、諸平の歌は収録されていないので問題は簡単ではない。これについては別稿に譲りたいと思う。

(20) 注十八前掲書簡

(21) しかし、長沢伴雄男楠次郎が藩に提出した系譜（和歌山県立文書館蔵『紀州家中系譜並に親類書書上げ』資料番

号一〇三〇五）によると長沢伴雄は病死したとする。

〔付記〕 本稿は平成十九年度科学研究費補助金（基盤研究B）による研究成果の一部である。

（かめい しん／佐賀大学地域学歴史文化研究センター  
教務補佐員）